

介護福祉士養成校におけるボランティア活動の課題

三浦 正樹¹⁾ 鈴木 圭子²⁾ 宮堀 真澄³⁾

A Study of Volunteer in Care and Welfare Education

Masaki MIURA Keiko SUZUKI Masumi MIYAHORI

要旨：本研究は、介護福祉士養成校における学生のボランティア活動の実状と、活動の課題を明らかにすることを目的として調査・分析を行ったものである。

その結果、ボランティア活動への参加者は多かったが、その目的は自己の職業的理由を主とした者が多く、活動が福祉施設に限定されたものであること、また、ボランティア活動の特徴の一つである自己啓発的な理由が少ないことなどが認められた。

これらのことから、多様な価値を承認し、共生の視点を持った介護福祉士を育てていくために、学生のボランティア活動の意味理解へ繋げる学習機会の強化、幅広い日常的な活動へとつないでいく支援体制の整備の必要性が示唆された。

キーワード：介護福祉士養成校、学生ボランティア、共生

Summary : This paper discusses the volunteer in care and welfare education through the survey result for care and welfare students.

The results show that many students have experience of volunteer, but the places of volunteer are limited in social welfare facilities, many students are motivated for their future job, and scantily motivated for self-enlightenment is usually one of trait on volunteer actions.

Considering this, it is necessary to increase opportunity for learning on volunteer, and improve the support system for broad scope and ordinary actions to train certified care worker with convivial and various viewpoint.

Key words : care and welfare education, student volunteer, conviviality

I. はじめに

現在、社会の変化を背景に、個性の追求、人間関係の緊密化、コミュニティーの再構築などさまざまな課題を解決していく方策として、「支え合う福祉文化の創造」の一つとしての「共生」が求められている。

こうした福祉の文化を創造しなければならない現代社会において、その文化創造の一端を担う介護従事者にとっても、人権視点を共通基盤とした福祉観、人間観に立つてのより深い専門性が求められていると考える。

このことは、介護福祉士には、単なる介護技術

を提供する職業能力だけに留まらず、21世紀の社会原理である「共生」、すなわち、多様な価値の承認、異質なものの承認¹⁾という職業人としての能力だけではなく、また職業人としての基盤をつくる人間としての思想に基づいて、自己を律するという自律的人間が求められている。このような能力、資質を持った介護福祉士を養成するためには、具体的な状況の中で、具体的に考えるという日常生活の中での実践、経験が重要視される。

ボランティア活動は、日常の中での実践、経験と深く関わる活動であり、さまざまな人々との経験を分かち合う、経験的、実践的な単に机上の学

介護福祉学科 1) 助教授 2) 3) 講師

本研究は、第9回日本介護福祉学会大会において発表したものに加筆したものである。

習、知識の習得だけではなく、主体的、成熟した人間となるための教育であり、「共生」のひとつでもあるとされる²⁾。

さらにボランティア活動は、主体的な実践活動を通して自己実現をはかり、自発性、行動性、社会貢献性をもった諸活動である。

これらを考えると、介護福祉士にとってのボランティア活動は、意義のあるものといえるが、介護福祉士とボランティア活動との関係性についての報告はあまりみられない。

そこで本研究では、介護福祉士養成校（以下「養成校」とする）学生にみるボランティア活動に関する調査を通して、介護福祉士養成におけるボランティア活動の意義・課題について考察を試みる。

II. 調査の方法

1. 調査対象：A短期大学介護福祉学科2年次生53名（男性4名、女性49名）。

2. 方法：無記名の質問紙法による集合調査。
対象者には調査の目的を説明し、了解を得た上で行った。

3. 調査紙の配布数及び回収：調査紙の配布数は53部、回収率100%、有効回答率は100%であった。

4. 調査期間：平成13年3月8日

5. 質問項目と分析方法：

質問項目は、a. ボランティア活動経験の有無、b. 活動日数、c. 活動理由（複数回答）、d. 活動先、e. 活動の満足度、f. 活動に満足できなかった理由、g. 活動をすすめるにあたり不便に思っていることとし、a. c. ~ e. は多肢選択法、b. f. g. は自由記載法とした。

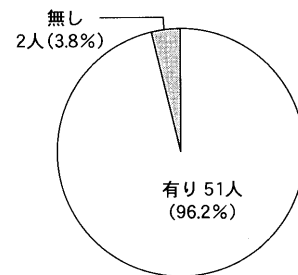
分析は、質問項目別の単純集計と、活動日数と活動の満足度、活動動機と活動の満足度それぞれのクロス集計、及び、活動日数と活動の満足度については χ^2 検定を行った。なお、ボランティア活動経験以外の質問項目に関しては、在学中に活動経験がある者のみを分析の対象とした。

III. 結果と考察

1. ボランティア活動経験の有無と活動日数

ボランティア活動に参加した者は、51名（96.2%）、参加しない者は2名（3.8%）であった（図1）。なお、参加しなかった者は女性2名であった。

図1 在学中のボランティア活動経験の有無（N=53）

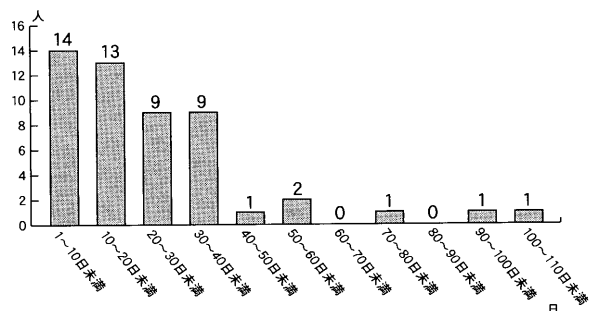


在学中の2年間のボランティア活動日数を訊ねたところ、最長で100日、最短で2日であり、平均は22.0日であった。これを10日を単位としてカテゴリー化すると、1日以上10日未満14名（27.5%）、10日以上20日未満13名（25.5%）、20日以上30日未満9名（17.6%）であった。1カ月以上の活動経験がある者は、30日以上40日未満が9名（17.6%）、45日が1名、50日が2名、70日、90日、100日が各1名の計15名（29.4%）であった（図2）。

また活動日数が平均未満であった学生は、33名（64.7%）で、平均日数以上の活動をした18名の平均活動日数は41日であった。すなわち、30日未満は、回答のあった51名中36名（70.6%）であり、1ヶ月未満の者が多数を占め、このうち27名（52.9%）が20日未満であった。

これより、活動に参加した者が大多数であるが、継続的活動への広がりが少ないことから、ボランティア活動の特性でもある日常的な活動をした学生はあまりみられないといえる。

図2 ボランティア活動日数（N=51）平均22.0日



ボランティア活動を通して体験できる「世代を越えての人間とのふれあい」、「実践を通じての連帯と協同の必要性」、「共生」などは、介護福祉士養成の現在のカリキュラムでは学ぶことが困難な面もある。「福祉教育は感性、理性、主体性教育の三つの局面でなされていくもの」³⁾であるが、それらはボランティア活動の機会を通じて広く学び得るものでもありボランティア活動に期待するものでもある。それらは深い実践、継続的活動によって統合され、培われ、習得し、深めることができると思う。

2 ボランティア活動を行った理由

ボランティア活動を行った理由について、複数回答で訊ねた結果を図3及び表1に示した。

図3 ボランティア活動の理由
(複数回答、総件数：145件、単位：件)

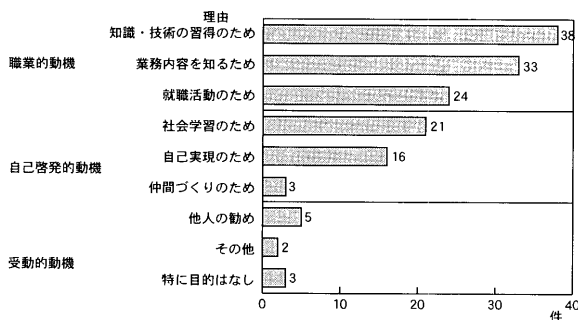


表1 ボランティア活動の理由

活動動機		件数	%	
			件数の割合	学生の経験者の割合
職業的動機	知識技術の習得のため	38件	26.2%	74.5%
	業務内容を知るため	33件	22.8%	64.7%
	就職活動のため	24件	16.6%	47.1%
	小計	95件	65.5%	186.3%
自己啓発的動機	社会学習のため	21件	14.5%	41.2%
	自己実現のため	16件	11.0%	31.4%
	仲間づくりのため	3件	2.1%	5.9%
	小計	40件	27.6%	78.4%
受動的動機	他人の勧め	5件	3.4%	9.8%
	その他	2件	1.4%	3.9%
	特に目的はなし	3件	2.1%	5.9%
	小計	10件	6.9%	19.6%
	合計	145件	100.0%	284.3%

最も多かった理由は、「知識・技術の習得」38件(26.2%)であった。次いで「業務内容を知るため」33件(22.8%)、「就職活動のため」24件(16.6%)、「社会学習」21件(14.5%)、「自己実現」16件(11.0%)、「仲間づくり」3件(2.1%)、「他

人の勧め」5件(3.4%)、その他2件(1.4%)、「特に目的無し」3件(2.1%)であった。

これらの理由を、知識・技術の習得、業務内容を知る、就職活動の3項目を「職業的理由」に、社会学習、自己実現、仲間づくりを「自己啓発的理由」とし、他人の勧め、その他、目的無しを「受動的理由」の3つに分類したところ、「職業的理由」が95件で全体の65.5%であり、自己の職業に直結する理由が多くを占めた。

「自己啓発的理由」である共生や人間とのふれあいなど職業と直結しない、自分自身の内的向上を理由とした者は、40件(27.6%)、その他、自らの意志でなく、他者からの働きかけで参加したと認められる「受動的理由」は10件(6.9%)であった。

さらに個々の対象者の複数回答で見ても、「知識・技術のため」(74.5%)、「業務内容を知るため」(64.7%)、「就職活動のため」(47.1%)と職業的理由をあげている者が多く、自己啓発的理由とした者は半数に達しなかった。

一般学生を対象にした内外学生センター(平成11年3月)の「学生ボランティア活動に関する調査研究」の中での「活動分野と活動動機」の9項目の、活動動機上位3つと比較すると、「新しい人と出会いたい」、「新しい感動できる体験をしたい」、「困っている人を助けたい」などいわゆる自己啓発的理由が上位であり、反対の結果となった⁴⁾。したがって、一般学生とは違う結果を示し、ボランティア活動経験が共生と言う意味、特徴が乏しい結果を示した。

3. ボランティア活動の場

ボランティア活動を行った場所を、図4及び表2に示した。

図4 ボランティア活動の場所
(複数回答、総件数：122件、単位：件)

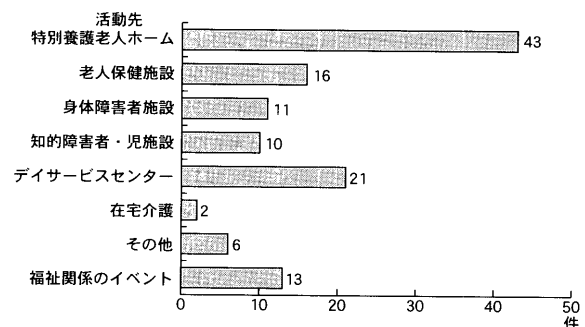


表2 ボランティア活動の場所

活動先	件数	%	
		件数の割合	学生の経験者の割合
特別養護老人ホーム	43件	35.2%	84.3%
老人保健施設	16件	13.1%	31.4%
身体障害者施設	11件	9.0%	21.6%
知的障害者・児施設	10件	8.2%	19.6%
デイサービスセンター	21件	17.2%	41.2%
在宅介護	2件	1.6%	3.9%
その他	6件	4.9%	11.8%
福祉関係のイベント	13件	10.7%	25.5%
合計	122件	100.0%	239.2%

最も多かった場所は、特別養護老人ホーム43件(35.2%)、次いでデイサービスセンター21件(17.2%)、老人保健施設16件(13.1%)、福祉関係イベント13件(10.7%)、さらに身体障害者施設11件(9.0%)、知的障害者・者施設10件(8.2%)、在宅介護2件(1.6%)、その他6件(4.9%)であった。

福祉関係イベントは、全国大会予選も兼ねた知的障害児・者のスポーツ大会、県主催のボランティアフェスティバル、民間団体の障害者とのふれあいコンサートなどであり、在宅介護については、訪問介護、またその他の回答は、ケアハウス、訪問給食であった。

大多数が施設での活動であり、施設関係が80件(65.5%)、デイサービスセンター、在宅介護の在宅関係は23件(18.8%)であった。また、対象をみると、老人関係が88件(72.1%)であり、福祉関係のイベントの他は、知的障害に限られた。

51名の学生中、43名が特別養護老人ホームで活動している。活動先は1カ所に留まらず、平均2.3カ所であるが、内、施設が1.5カ所で施設活動が中心であることが、ここからも明らかである。

調査対象者の進路は、特別養護老人ホーム18名、老人保健施設16名、介護療養型医療施設7名と調査対象53名中41名(77.3%)が老人施設関係で、その他は福祉関係大学への進学、社会福祉協議会、一般事務、本人希望による未定となっており、ボランティア活動先と進路先と類似している。

前述の内外学生センターにおける調査においては、現在の学生の活動分野の複数回答の結果では、上位からあげると、「子ども達のスポーツ指導」、「お年寄りや障害を持つ人を助ける」、「国際交流に関する活動」、「自然環境を守る」、「伝統文化等を守り育てる」、「地域での健康を守る運動」、「災害援助活動」、「学習を助ける」、「生き生きとした

地域を創る」となっており、ボランティア活動は多岐にわたっている⁵⁾。

一般学生に比べて、養成校の学生であり、ボランティア活動を職業選択の一つとして、福祉、施設、老人、介護の延長線上で考えていることは当然のことである。

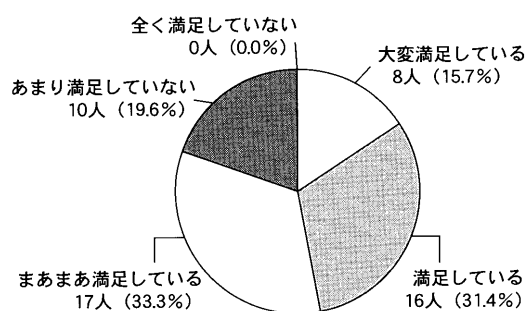
しかし、多様な価値の承認、より広い視点での思考が出来、自己を律し、共生の思想に立つ、介護者としてその基盤が求められる時、現代社会においてボランティア活動は、より日常生活の中での経験的、実践的教育として意味を持つものである。

より成長を促すという視点で実際に行った活動の場を検討した場合、今回の調査対象者の活動先は、限定的であることが示された。

4. ボランティア活動の満足度

ボランティア活動全般についての満足度は、図5の通りである。

図5 ボランティア活動に対する満足度 (N=51)



「大満足」8名(15.7%)、「満足」16名(31.4%)、「まあまあ満足」17名(33.3%)、「あまり満足していない」10名(19.6%)で、「全く満足していない」者はいなかった。

これより、ボランティア活動に対しては、41名(80.4%)が満足と答えていた。

活動日数別の満足度を表3に示した。活動日数別と満足度間には、有意差は認められなかったが、「大満足」であった者8名のうち5名(62.5%)は30日以上活動をしており、10日以上20日未満が2名、20日以上30日未満が1名であり、「大満足」と回答した者に、活動日数が10日未満であった者はいなかった。

さらに活動理由と満足度について、表4に示した。

表3 活動日数と活動の満足度

単位：人（％）

満足度 日数	大変満足	満足	まあまあ満足	あまり満足していない	合計
1日～10日未満	0人 (0.0%)	6人 (42.9%)	5人 (35.7%)	3人 (21.4%)	14人 (100.0%)
10日～20日未満	2 (15.4)	4 (30.8)	4 (30.8)	3 (23.1)	13 (100.0)
20日～30日未満	1 (11.1)	3 (33.3)	3 (33.3)	2 (22.2)	9 (100.0)
30日以上	5 (33.3)	3 (20.0)	5 (33.3)	2 (13.3)	15 (100.0)
合計	8 (15.7)	16 (31.4)	17 (33.3)	10 (129.6)	51 (100.0)

$\chi^2=7.038$ ns

表4 活動理由と活動の満足度

単位：件（％）

活動動機	満足度	大変満足	満足	まあまあ満足	あまり満足していない	合計
職業的動機 95件 (65.5%)	知識・技術の勉強のため	6件 (15.8%)	12件 (31.6%)	14件 (36.8%)	6件 (15.8%)	38件 (100.0%)
	業務内容を知るため	5 (15.2)	9 (27.3)	14 (42.4)	5 (15.2)	33 (100.0)
	就職活動のため	4 (16.7)	11 (45.8)	4 (16.7)	5 (20.8)	24 (100.0)
	小計	15 (15.8)	32 (33.7)	32 (16.7)	16 (16.8)	95 (100.0)
自己啓発的動機 40件 (27.6%)	社会勉強のため	4 (19.0)	6 (28.6)	9 (42.9)	2 (9.5)	21 (100.0)
	自己実現のため	4 (25.0)	6 (37.5)	5 (31.3)	1 (6.3)	16 (100.0)
	仲間づくりのため	2 (66.7)	0 (0.0)	1 (33.3)	0 (0.0)	3 (100.0)
	小計	10 (25.0)	12 (30.0)	15 (37.5)	3 (7.5)	40 (100.0)
変動的動機 10件 (6.9%)	他人の勧め	0 (0.0)	3 (60.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
	その他	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	2 (100.0)
	特に目的はなし	1 (33.3)	0 (0.0)	1 (33.3)	1 (33.3)	3 (100.0)
	小計	1 (10.0)	4 (40.0)	3 (30.0)	2 (20.0)	10 (100.0)
全体	26 (17.9)	48 (33.1)	50 (34.5)	21 (14.5)	145 (100.0)	

自己啓発的理由を選択した者に「大変満足」と高い満足度を示した割合が大きく、「満足」「まあまあ満足」を含めてみても、自己啓発的理由が92.5%と職業的理由の83.2%より高かった。

この結果から、活動理由が自己啓発的であり、自己の内面性の向上を目指し、継続的活動をすることにより、満足度が高くなることが考えられる。

ボランティア活動に満足できなかった理由について、自由記載で訊ねた結果を、類似した内容毎にカテゴリー化したところ、表5に示したように5つのカテゴリーに分類できた。

表5 「自分のボランティア活動に満足していない理由」記載内容

カテゴリー (記載件数)	記載内容
活動内容 (4件)	①もっと積極的に行きたかった。 ②技術を身に付けるためだったが、コミュニケーションが主だった。 ③何もすることがなく、ずっと利用者とのコミュニケーションだった。 ④ボランティア先に望まれているようなボランティアができたか気になる。
活動期間、回数 (3件)	①1年の夏休みにしか活動しなかった。 ②もう少し数多くボランティアをすることができたのでは、と感じる ③もう少し長い期間行きたかった。
活動動機 (1件)	①就職活動だけでなく、本心だけでやりたかった。
活動の結果 (1件)	①就職の役に立たなかった。
その他 (1件)	①施設の場所が分からず困った。

回答は、9件と少なかったが、活動内容に関することが4件、活動期間に関すること3件、活動動機に関すること、活動結果に関すること、その他が各2件であった。

活動内容に関しては、「技術を身につけるためだったが、コミュニケーションが主だった」「何もすることがなく、利用者の方々とコミュニケーションだった」など、コミュニケーションを理由としたもの、「もっと積極的に行いたかった」、「ボランティア先に望まれているようなボランティアが出来たか気になる」など、コーディネートが良くできていれば解決できる内容であった。

コミュニケーションを理由としたものについては、ボランティア活動は、実践として深く関わっていくことで深められて行くであろうし、介護職が、コミュニケーションを基盤とし、関係を創っていく行為であることを考えれば、趣旨が十分に理解されていないことが示唆された。

この他、活動期間、動機、目的に対しての結果など、物理的理由であった。

次に、ボランティア活動を行う際に「不便・疑問」と思っていることを自由記載で訊ねたところ、回答は14件であった。回答内容を類似したものを

まとめカテゴリー化したところ、表6の通り、6つのカテゴリーに分類でき、それらは、交通の便に関すること4件、活動内容に関すること3件、活動の開始方法に関すること2件、活動動機に関すること2件、その他1件であった。

表6 「ボランティア活動に関して不便・疑問に思っていること」記載内容

カテゴリー (記載件数)	記 載 内 容
交通の便 (4件)	①場所が遠いと、交通手段がなかったりで行けなかった(3件) ②交通の便が悪い。
活動内容 (3件)	①短い期間なので早く慣れることが大変だった。 ②ボランティアということで掃除などを目的とされた。 ③1年の夏に行ったが全く何もできず、失意のまま終わった。
活動の開始方法 (2件)	①ボランティア交渉手続きの仕方 ②どうやってボランティアをしていいのかとまどった。
活動動機 (2件)	①学校側の「就職のためにボランティアを」という言葉に反感を覚えた。 ②学校側の教えもありボランティアに行った。
受け入れ (2件)	①私達の技術がどの程度か施設側が理解していないため、信用してもらえない(2件)
その他 (1件)	①言葉遣い(なまると尊敬語にならない気がして)

交通の便に関しての記述は、「場所が遠いと交通手段がなかったりで行けなかった」などであり、活動内容に関しては「早く慣れることが大変」「掃除などを目的とされた」、活動の開始方法に関しては、「交渉手続きの仕方」などであった。これらを見ると、ボランティア活動を地域に広げていくためには、活動先の選択、活動内容の検討、受け入れ側のコーディネーターとの話し合いの必要性等コーディネーターの養成、システムの重要性が指摘できる。

IV. 結論

今回の調査から、以下のことが明らかになった。

1. 調査対象は少ないが、活動に参加した者は多かった。しかし、活動日数で見ると、継続的活動をした者は少なかった。
2. 活動理由として職業的理由を主とした者が多く、ボランティア活動は内発的なものが必要であるが、自己啓発的理由を述べた者は少なかった。
3. 活動場所で見ると、施設、福祉に活動が限定的であり、ボランティア活動が持つ多様な広がりは見えなかった。
4. 活動の満足度については、満足と答えた者は多いが、大変満足とした者については、活動日数が多く、自己啓発的な理由を挙げた者の割合が多かった。
5. 不満の理由には、物理的理由が見られ、アド

バイスのシステムが必要であることが認められた。

6. 活動場所、受け入れ先との関係については、職業的能力の向上は期待できるかもしれないが、多様な価値、人間的能力の習得等については課題が残った。
7. 活動経験と就職が直結的であった。

以上の結果から、ボランティア活動の社会性が強調されると共に、継続性、多様性を持たせ、活動場面の拡大を図り、さまざまな機会に触れさせていくことが大切であろう。

そのためには、養成校としても活動の奨励だけではなく、具体的な活動機会の紹介、活動支援としての相談活動、活動へつないでいく架橋的支援体制の体制(システム)整備と共に、ボランティア活動の意味理解につなげる学習機会を設けながら、内容の強調をしていくことが必要である。

V. まとめ

ボランティア活動は、その活動範囲は広いこと、生活の共感、気づき、日常の中に活動の場があることが強調されて良い。そうした日常性が満足度を深め、介護福祉士としての資質や能力の向上に役立つものといえる。

本研究の限界として、今回の調査は、パイロット的であり、これを普遍化、一般化することはできないが、今後、この調査を発展させ位置づけを見つけていくために調査を継続していく必要があり、対象を他校へも広げていくことで、介護福祉士養成校として活動の意味が深められる。

引用文献

- 1) 安藤博：いまなぜ「ボランティア教育なのか」、現代教育科学, 明治図書8, p6, 1997.
- 2) 岡本栄一：入門ボランティア活動—管理社会への挑戦, 大阪ボランティア協会, p18, 1998.
- 3) 一番ヶ瀬康子, 大友信勝, 日本社会事業学校連盟編：戦後社会福祉教育の50年, ミネルヴァ書房, p17, 1998.
- 4) 内外学生センター：学生のボランティア活動に関する調査研究報告書, 内外学生センター, p57, 1999.
- 5) 前掲4), p53.

参考文献

- 1) 橋本, 別惣, 豊山: 介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係, 川崎医療福祉学会誌, 8(2), 1998.
- 2) 谷田勇人: 福祉ボランティア活動をする大学生の動機分析, 社会福祉学, 41(2), 2001.
- 3) 内外学生センター: 大学とボランティア, 2001.
- 4) 濱野一郎, 遠藤興一編: 社会福祉の原理と思想, 「ボランティアリズムと社会福祉」岩崎学術出版, 1998.
- 5) 巡静一, 早瀬昇編著: ボランティアの理論と実際, 中央法規出版, 1997.
- 6) 小谷直道: 市民活動時代のボランティア, 中央法規出版, 1999.
- 7) 筒井のり子: 大学の授業におけるボランティア活動, 月刊ボランティア, No.367, 2001.